

吉備国の語源「黄蕨」調査報告

日本先史古代研究会 会員 丸谷 憲二

1 はじめに

吉備国の語源「黄蕨」については、平成 20 年 8 月の吉備学会歴史研究部会(岡山県立博物館)基調報告『吉備とはなんぞや』で報告しています。調査の経過をご報告致します。

平成 20 年 8 月 5 日に大井透氏(香川県坂出市)より、『陶山系譜』(瀬戸内海歴史民俗資料館蔵:香川県高松市亀水町:五色台)の調査を依頼されました。『陶山系譜』の特長は神統譜。元祖は天照国照彦火明命とあり尾張連等の遠祖です。神話に登場する神々から始まる系図であり、それに近い事実が伝承されてきたと考えました。備中古名『黄蕨』(キハラ)とのルビが有ります。私にとって備中古名『黄蕨』(キハラ)は初見です。ご指導を受けている考古学、中世史の先生方に聞きまくりました。誰もご存知有りませんでした。大井透氏に一度は調査不可としてお断り致しました。しかし、大井透氏の『黄蕨』(キハラ)が一番重要であるという立場に揺らぎがありません。

2 『黄蕨』の出典

『黄蕨』の出典は、推古 30 年(622)成立の『先代旧事本紀大成経七十二巻本』です。

『旧事本紀』は、『先代旧事本紀』と『神代皇代大成経』の二つから成立しています。尾張氏・物部氏等、六家の秘伝書と天皇家の内録という超古代の学問書を「一字一字変えないで写した」と言われるのは『先代旧事本紀』の部分です。『神代皇代大成経』には、聖徳太子が補足説明として付け加えた部分や太子自身が書いた『十七条五憲法』や『予言書』、さらに太子の死後、秦河勝らの手によって加えられた部分が含まれます。

『陶山系譜』

天照国照彦火明命 → 天香山命 越後国蒲原郡 伊夜日子神社
宇摩志摩治尊 石見国安濃郡 物部神社

神武天皇東国発向之為從_つ日向国_つ移_つ備中_つ国兵官軍ニ付_つ趣。則御武将宇摩志摩治尊之軍_つ虜_つナリ依而。皇居之名_つ神嶋_つ宮ト侍ル。其後改而神嶋王泊ト号スハ寄_つル。皇居_つ地名也。三年之神遊兵根御船之数整内黄蕨(備中古名)之勇猛御方ニ馳集。宇摩志摩治尊_つ内裏為_つメニ守護_つ之ヨツテ_つ司_つ所ヲ物部ト名シ給フハ是ヨリ始ル。武士をモノノフト訓スル。利ヨリ非起ルニ即物部別号ニ下ル由此城地今ノ要砂築クニ洲濱ヲ城之外ト堀ニ用ユルニヨリ諸人呼_つフ洲山城ト。天皇叡山聞而洲山ト給ヒ亦陶山ト下シ給フ也。八杉 田邊 原 澤山 高辻 奥村 右之氏陶山家ヨリノ別家武功軍記ニ有テ世ニ知ルノ所ナリ陶山ノ定紋洲濱ニ寄而洲濱ニ定メル。古城跡備中小田郡要砂村。古書ニハ西砂トアリ。

宇摩志摩治尊ヨリ七十五代 備中守高信 寿永三年(1184)屋島合戦ニ通盛教経トモニ勇々敷働後長洲赤間關ニ而討死。

3 文献調査結果

岡山県立資料館と岡山県立図書館蔵書を調査しました。岡山県の歴史研究者として「黄蕨説を正しい」としているのは、『吉備国史』の小早川秀雄のみです。

成立年	説	記録
平成 13 年 (2001)	『日本古代地名事典』吉田茂樹 『君・公説』	従来より「きび(黍)」の意として定着しているが、古代地名の比較検討からすれば、「きび(黍)」の意は、ほとんどないといってよい。大化前代より、ヤマト王権の片腕として活躍し地方の首長の尊称である「きみ(君・公)」を国名にした可能性がある。
平成 2 年 (1990)	『岡山県史 第三巻 古代Ⅱ』吉田晶 『不明・黍説紹介』	現在の岡山県全域と広島県東部を中心とする地域(美作・備前・備中・備後)は、古代では「吉備(きび)」と総称されていた。 なぜこの地域が「吉備」と呼ばれていたのかは明らかではない。

		古くから「黍（きび）」の豊かに稔る農耕の適地であったためであろうとする説が主張されているが、確かなことはわからない。
昭和5年（1930）	『岡山県通史』 永山卯三郎 『黍説』	『吉備の文字、一様ならず、日本紀に「吉備」日本紀纂疏に「寸籩（きび）」古事記に「岐備」又「黄薇」と記し又 夜叉国、廣遠国と見ゆ。』『吉備の名義大成旧事本紀に「・・・黄薇（キワラヒ）国、作者作吉備之字」と黄薇「キワラビ」省略されて「キビ」となると面白き説明なり。固より信據するに足らざる俗説なれども従来汎く世に行はれたる説なり。』 「吉備はキビ（黍）にして吉備国の土地、黍穀の耕種に好適しその産額頗る多く古来黍酒、黍団子の料となりしことは万葉集の歌にも見えて其の名産たり。」
嘉永2年（1849） 自序	『吉備国史』 小早川秀雄 『黄薇説』	吉備国 大古は大八州の国とて八つ国有り其八つの一つは吉備の国なり。吉備とは何故に云う。其本きわらびの国と云ふ事を略して、きびと云ふなり。此国には黄なるわらびの多く生ずるの山国なれば吉備山とも云ふ。藻塩草に吉備山を載せたり。古語拾遺に云ふ神武帝の時、高嶋宮にます事七年其時に黄なるわらび六本を生ずると云ふ。わらびは山に生ずる品物なれば上古は山のみにて田野は後に開き発（おこ）しぬる土地かとは思はる。
天保8年（1837）	『東備郡村志』 松本亮 『寸籩説』	「大成経には、人皇の大祖神武天皇東征して、吉備国に入り給ひ、高島の宮に在すとき、其行宮の庭に一夜に八の蕨を生ず。其長一条二尺、其太さ二尺五寸、其色濃黄、国有神人云黄光命。即朝奏曰、此草異艸也。当治八州祥、是天為端、軍卒競之故、道此国号黄蕨国とみえたり。ここに以て、吉備は黄蕨の転なるか。然れども其説疑ふらくは正しからず。按に、吉備国を日本記の积に寸籩（きび）に作る。然れば吉備は寸籩の転なるべし。寸籩とは当国に名高き蓑山より起れるか。・・・」
安永7年（1778）	『寸籩乃塵 上巻』 土肥経平 『寸籩説』	「吉備国ていふは、吉備子州大八州の一にして、大日本のなり出し時にその称あれば、類もなき古き国名なり。是を寸籩国とも昔し書しより日本記の积并纂疏に見えたり。又黄薇国ともかく。それは神武天皇東征したまふ時に、此国高嶋宮にしばし皇居の時、黄なる薇一夜の中に生出て、是を供御にまいらせしより、黄薇といふよし、大成経といふものに見えしといへども、此書據とすべきものならねば、信ずべからず。」
元文4年（1739）	『備陽国誌』 和田弥兵衛正尹 他 『不明・黄蕨説紹介』	「大成経に清貞天皇（忍海飯豊青尊）詔りして尾張の覚連を以て、黄蕨（吉備の文字を黄蕨と出来大正史に見えず、今此書に初て出たり。）の前中後を分とあり。是より先日本紀仁徳天皇六十七年に、吉備の中国といふ事見えたり。いづれか是なる事をしらす。」
貞享2年（1685） 中野氏版	池田家文書に 『古語拾遺言余抄（こごしゅういげんよししょう）』 竜野熙近 有り。	竜熙近は、寛文3年（1663）写『先代旧事本紀大成経破文』・延宝9年（1681）写『先代旧事本紀大成経破文要略（たいせいきょうはもんよりやく）』の著者である。
大同2年（807） 編纂 807～906年成立	『先代旧事本紀十卷本』 皇孫本紀 全1巻。 斎部広成 『記録無し』	吉田兼俱（かねとも）によって『古事記』『日本書記』と共に『三部の本書』として尊重された書物。初見は平安時代。 「先代旧事本紀卷六 皇孫本紀」に、 「乙卯年春三月甲寅朔己未。徒入吉備国。起行宮以居之。是曰高嶋宮。積三年間。脩舟楫蓄兵食。将欲以一举而平天下也。」
明和3年（1766） 写	<small>せんだいきくじほんきたいせいきょう</small> 『先代旧事本紀大成経』 七十二巻本』武田本 跋文の初句「夫大経者先 天之神典、前代之聖史也」 羽柴純益平宗写 『黄蕨説の初見』	編纂者 聖徳太子・秦河勝。推古30年（622）成立。 神託に基づき五十宮、三輪宮、天王寺に秘蔵。 ○「先代旧事本紀 卷第三 陰陽本紀」より 「次生_黄蕨児嶋_」 「黄蕨国名面吉高雌」 「次黄日（蕨）児嶋謂_健_日方男_」 <small>いい たける</small>

		<p>「是齋元_{あきつひこ}神不_{あきつひめ}同_{あきつひめ}異_{あきつひめ}国_{あきつひめ}諸_{あきつひめ}神_{あきつひめ}無_{あきつひめ}威_{あきつひめ}、其法元也、先産_{あきつひめ}十有三柱神等_{あきつひめ}、先生_{あきつひめ}天水建大秋津彦_{あきつひめ}神_{あきつひめ}、次生_{あきつひめ}地水建小秋津媛神_{あきつひめ}、此神坐_{あきつひめ}黄蕨前国一宮_{あきつひめ}矣、潤_{あきつひめ}世界_{あきつひめ}神_{あきつひめ}、有_{あきつひめ}威德_{あきつひめ}神_{あきつひめ}、此二神者水方神也」</p> <p>○「大成経 第十六 目録」より 「黄蕨津彦神」</p> <p>○「卷第十六 天孫本紀下」より 「大歳在_{だいさい}乙卯_{だいさい}、三月甲寅朔己未、從_{だいさい}入_{だいさい}黄蕨国_{だいさい}兮、起_{だいさい}行宮_{だいさい}居御、是日_{だいさい}高島宮_{だいさい}、積_{だいさい}三年_{だいさい}滝、而楯_{かじ}舟楫_{かじ}蓄_{かじ}兵食_{かじ}也、将_{かじ}欲_{かじ}以_{かじ}一_{かじ}举_{かじ}而平_{かじ}天下_{かじ}也、大_{かじ}己_{かじ}貴尊_{かじ}児木_{かじ}勝彦_{かじ}命_{かじ}神_{かじ}、又黄蕨津彦命、為_{かじ}国_{かじ}首_{かじ}在_{かじ}国_{かじ}頭_{かじ}見_{かじ}天_{かじ}尊_{かじ}、作_{かじ}敬_{かじ}與_{かじ}児_{かじ}国_{かじ}」君_{かじ}命_{かじ}、奉_{かじ}饗_{かじ}奉_{かじ}事_{かじ}、自_{かじ}造_{かじ}陳_{かじ}具_{かじ}、集_{かじ}兵_{かじ}調_{かじ}陳_{かじ}、進_{かじ}奉_{かじ}皇_{かじ}軍_{かじ}、于_{かじ}時_{かじ}行_{かじ}宮_{かじ}庭_{かじ}一_{かじ}夜_{かじ}生_{かじ}八_{かじ}蕨_{かじ}、其_{かじ}長_{かじ}一_{かじ}条_{かじ}二_{かじ}尺_{かじ}、其_{かじ}太_{かじ}二_{かじ}尺_{かじ}五_{かじ}寸_{かじ}、其_{かじ}色_{かじ}濃_{かじ}黄_{かじ}、国_{かじ}有_{かじ}人_{かじ}神_{かじ}、云_{かじ}黄_{かじ}光_{かじ}命_{かじ}、即_{かじ}朝_{かじ}奏_{かじ}曰_{かじ}、此_{かじ}草_{かじ}異_{かじ}草_{かじ}也、当_{かじ}治_{かじ}八_{かじ}州_{かじ}祥_{かじ}、是_{かじ}天_{かじ}為_{かじ}瑞_{かじ}、軍_{かじ}卒_{かじ}競_{かじ}之_{かじ}、故_{かじ}道_{かじ}此_{かじ}国_{かじ}号_{かじ}黄_{かじ}蕨_{かじ}国_{かじ}」</p>
『先代旧事本紀大成経七十二卷本』の原本 後藤隆 調査	編纂者 聖徳太子・秦河勝 推古 30 年（622）先代旧事本紀大成経完成。神託に基づき五十宮、三輪宮、天王寺に秘蔵 寛文 10 年（1670）『先代旧事本紀三十一卷』鶴鶴（ササキ）伝 白河本出版。 延宝 3 年（1675）『聖徳太子の五憲法』釈潮音道海禪師 著（黄檗宗黒瀧派・開祖）出版。 延宝 7 年（1679）『先代旧事本紀大成経七十二卷本』（潮音本）出版。 天和 1 年（1681）徳川幕府、『大成経七十二卷本』（潮音本）を禁書・回収処分。 明和 8 年（1771）京都・本屋仲間の『禁書目録』で先代旧事本紀大成経が目録筆頭となる。	

4 考察

- ① 先代旧事本紀（せんだいくじほんき）は3つに分類されています。
 - ①『先代旧事本紀十卷本』
 - ②『先代旧事本紀三十一卷本』（白河本・寛文 10 年（1670）刊行）
 - ③『先代旧事本紀大成経七十二卷本』
『先代旧事本紀大成経』（さきのみよの ふることの もとつふみ おおいなるおしえ）に黄蕨説が記録されています。延宝 7 年（1679）『神代皇代大成経』として刊行。
天和 1 年（1681）徳川幕府、『大成経七十二卷本』（潮音本）を禁書・回収処分。
- ② 岡山県の歴史研究者として黄蕨説を正しいとしているのは、『吉備国史』の小早川秀雄のみです。
『先代旧事本紀十卷本』と『先代旧事本紀大成経七十二卷本』の記録を比較すれば、『先代旧事本紀大成経七十二卷本』が『先代旧事本紀十卷本』の原典であることは明確です。戦後の皇国史観に基づく日本史の見直し作業で偽作と断定されているが判断ミスです。
- ③ 吉備の語源は黄蕨です。黄蕨説の「黄なるわらび八本を生ずる」の比喩している意味の解説が必要です。
注目すべきは『寸箴乃塵』・土肥経平の『寸箴説』です。寸箴は「スンハ・ソンハ」です。『日本書紀』『日本書紀纂疏（にほんぎさんそ・一条兼良著・卜部兼右写）』『日本書紀抄』『釈日本紀』を検証しても寸箴との記録はありません。何故、検証すれば間違いとわかる 説を書名にまで使用しているかを考察すべきです。『寸箴乃塵』の出版は安永 7 年（1778）であり、明和 8 年（1771）京都・本屋仲間の『禁書目録』で先代旧事本紀大成経が『目録筆頭』となっています。研究者として大成経の黄蕨説を紹介し『黄蕨説』が正しいと考えても「信ずべからず」としか発表できない時代背景を読み取らねばなりません。
- ④ 永山卯三郎は二次・三次資料により「黍説を創作」しています。
蕨はわらびの一種の「のえんどう・ふなばらそう」です。『古事記』に「岐備」・「黄蕨」・夜叉国・廣遠国との表記は活字本では発見できません。しかし、書写の時代であり誤写があったのかも知れません。

6 まとめ

「キハラ」とのルビに注目しました。「蕨」の読みは ^{いんがく}「^{いんがく}カツ」でありハラとは読めません。長尾小八郎家系図に「九代目 式部大輔 正四位 清幸 於_テ学館院_ニ韻 鏡 訓鏡書ヲ製作ス」とあります。学館院の具体的な教育研究^{いんがく}内容の記録です。

韻 鏡 の研究とは漢字音の研究であり中世以降韻 学 の中心議題となりました。南宋の紹興 31 年(1161)に張麟之が入手し、50 年に及ぶ研究の後、序文をつけて初めて刊行されました。

岡山県の江戸時代から戦前までの研究者は『先代旧事本紀大成経七十二卷本』の記録を「8本の黄色いワラビ」と訓読みし「黄色いワラビ」を植物生態学と考え「ワラビの突然変異」として考察しています。私は、この基本認識は間違っていると考えました。

7 参考文献

- ①『先代旧事本紀大成経(一)・続神道体系 論説編』小笠原春夫校注 平成 11 年 神道体系編集会
- ②『先代旧事本紀・新訂増補 国史大系 7』昭和 41 年 吉川弘文館
- ③『古代物部氏と先代旧事本紀の謎』安本美典 平成 15 年 勉誠出版
- ④『謎の根本聖典・先代旧事本紀大成経』後藤隆 2004 年 徳間書店
- ⑤『国書総目録 第三・六巻』昭和 48 年 岩波書店
- ⑥『岡山県の地名 日本歴史地名体系 34』1988 平凡社
- ⑦『日本古代地名事典』吉田茂樹 2001 新人物往来社
- ⑧『第一節 吉備社会と大和 岡山県史 第三巻 古代Ⅱ』吉田晶 平成 2 年 岡山県
- ⑨『岡山県通史』永山卯三郎 昭和 5 年 昭和 51 年復刻 岡山県通史刊行会
- ⑩『吉備国史・新編吉備叢書 第一巻』小早川秀雄 昭和 51 年 歴史図書社
- ⑪『東備郡村志・吉備群書集成(二)』松本亮 昭和 45 年 歴史図書社
- ⑫『寸箴乃塵 上巻・吉備群書集成(一)』土肥経平 昭和 45 年 歴史図書社
- ⑬『備陽国誌・吉備群書集成(一)』和田弥兵衛正尹他 昭和 45 年 歴史図書社
- ⑭『池田家文書総目録』昭和 45 年 岡山大学附属図書館
- ⑮『日本書紀纂疏・日本書紀抄・天理図書館善本叢書 和書之部 第二十七巻』昭和 52 年 天理大学図書館
- ⑯『积日本紀・新訂増補 国史大系 第八巻』昭和 45 年 吉川弘文館
- ⑰『日本書紀前篇・新訂増補 国史大系 第一巻上』黒坂勝美 昭和 41 年 吉川弘文館
- ⑱『古事記祝詞・日本古典文学大系 1』倉野憲司 武田裕吉校注 昭和 33 年 岩波書店
- ⑲『風土記・日本古典文学大系 2』秋本吉郎校注 昭和 33 年 岩波書店
- ⑳『积日本紀三・日本古典文学大系 14』青木和夫校注 1992 岩波書店
- ㉑『积日本紀一・日本古典文学大系 12』青木和夫校注 1989 岩波書店
- ㉒『日本書紀通积 第一』飯田武郷 昭和 5 年 内外書籍
- ㉓『芸備国郡志 下・備後叢書 第二巻』昭和 54 年 芸備郷土誌刊行会

平成 22 年 5 月 31 日